

図書紹介

Office of the Prime Minister, Government of Thailand: *Thailand, Official Yearbook, 1964*. Government House Printing Office, Bangkok, 1965. 702 p.

タイにはこれまで、いくつかの商業出版物としての年鑑はあったが、このたび、はじめて政府出版物としての年鑑が、Phya Srivisar 大佐を委員長とする総理府編集委員会によって編集され、政府印刷局より刊行された。

これは、とくに政府活動を中心としての、タイ国最近の状態の公式報告ともいうべきものである。大判800ページ近い大部なもので、写真も豊富に挿入され、統計類も多い。その内容としては、つきの諸項目からなる。

- 1) タイの自然と歴史
- 2) タイの政治と行政
- 3) 外交
- 4) 国防
- 5) 社会厚生
- 6) 医療保険
- 7) 司法
- 8) 産業と経済開発
- 9) 貿易と金融財政
- 10) マス・メディア
- 11) 教育
- 12) 宗教
- 13) 芸術と文化
- 14) スポーツ
- 15) 観光

各項目は、それぞれ主管官庁によって担当執筆されているようである。したがって、それだけに統一性が乏しく、精粗まちまちである。また、一般のタイ入門書にみられるような主観的記述がなく、もっぱら政府報告としての無味乾燥なものである。(かならずしも客観的叙述とはいえないところがある。というのは、政府にとって不利なことは省かれ、逆にともすれば政

策の効果が大きく描きだされるきらいがあるからである。)

また、本書は年鑑とはいふものの、序文でことわっているように、毎年出版されるものでない。ここ当然、大きな変化のないかぎり、出版されないとのことである。

この意味で、本書は政府の年次報告でもない。政府版の「タイ国入門」といったらいちばん適切なのではないかと思う。その政府版という限界内で、叙述は比較的客観的であり、正確である。タイについてなんらかの研究をしようとする場合、まず一応読まれる必要がある。たとえばタイの教育を研究しようとするときには、本年鑑の教育の項目に目をとおすことが、最もてっとりばよい。こういった意味で、タイ研究に不可欠なものである。

しかも、これだけ大部なものが、わずか40パーツ(US\$2)で市販されている。政府刊行物なればこそである。

わたくしは、これだけまとまった英文の出版物を刊行するにいたったタイ国政府の調査行政能力にたいして、いまさらながら、心から敬意を表したい。

(本岡 武)

Frank C. Darling: *Thailand and the United States*. Public Affairs Press, Washington, D. C., 1965. 243 p.

本書にシカゴ大学 Hans J. Morgenthau 教授が序文をよせ、「学者による歴史の編集は政治家や大衆に現実の問題の根源を教えるものである」と強調し、ここにとりあつかわれるアメリカとタイとの関係史は、アメリカのタイにたいするこれからの政策のありかたに重要な価値があるという。

たしかに、本書はこうした意図のもとに書かれたようだ。著者 Frank C. Darling 博士は、ワシントンの American University で政治学の ph. D. をとったあと、チュラロンコーン大学とタマサート大学の

講師として3カ年バンコク滞在、ついで中央情報局にアジア問題の専門家として8年間在勤、1960年以来コロラド大学の政治学助教授をつとめている。

この著者の履歴は本書がきわめて現実的・政策的であることを示すであろう。つまり、本書はアメリカとタイの関係史とはいうものの、19世紀はじめから第2次世界大戦にいたる歴史にはたった1章「初期のアメリカ・タイ関係」がさかれているだけである。

本書は主として、アメリカとタイとの関係がきわめて密接となった第2次世界戦争終結後からサリット政権下にいたるまでの20年たらずの期間を対象とする。そして、この期間において、アメリカがタイにいかなる政策をうちだし、援助をおこなったか、それがタイにいかなる影響をあたえ、またタイがいかにかこれに対応したかという問題をとりあつかう。

この間の経過を、豊富な文献、タイ・アメリカの双方の関係者とのインタビュー、さらに著者自身のバンコクならびにワシントンのICA在勤の経験にもとづいて、詳細に述べている。まことに、戦後の米・タイ関係史として出色のものだと思う。

しかし、その結論は、きわめて常識的だ。いわく、「アメリカはタイの国家保障をつよめた。アメリカの技術援助はタイの経済発展の刺激となった。アメリカの教育計画はタイの知識水準を高めることができた。しかし、軍事援助に重点をおいた結果、軍部がこの国の支配的な政治グループとなった。アメリカはかならずしも1951年以來の軍部独裁の条件を創出したのではない。これには、その他のタイの歴史的條件が作用している。しかし、アメリカのタイをして東南アジアの反共基地たらしめようとする政策のため、軍部は政治的・経済的問題により関与する結果となった。アメリカの軍事援助と狭量な戦闘的反共主義とが結びついて、(民主主義社会になければならない)政府反対活動を阻止しているのだ」と(P.214)。

わたくしは、こういった見解の書物が軍部独裁のバンコクで公然と販売されているのをおもしろいと思う。また、わたくしは、日本・タイの戦後の関係史、とくに日本がタイにいかなる影響を与えたかを主題とする研究がなされてほしいと、本書を読みながらつくづく痛感したしだいである。(本岡 武)

Eunice S. Matthew: *The Land and*

People of Thailand, J. B. Lippincott Company, Philadelphia and New York, 1964. 160 p.

世界的な観光ブームのため、アメリカやイギリスで、いくつかの外国事情紹介の国別シリーズが出版されている。ここに紹介する Matthew 女史の「タイの土地と人間」は、もう42冊を数えている Portraits of the Nations Series の1冊である。

もともと、わたくしは外国事情の案内書を読むのが好きだ。しかし、こうした新刊を紹介するのは、それ以上に、なんらかのテーマで外国を研究しようとする場合、その国の一般的知識をもっておくことが必要であるからである。(たとえば、その専攻とするところが自然科学であっても、「タイは回教国ですね」といった調子でタイへこられては、その研究がうまくゆくとは思われない。なぜなら、自然科学研究の場合でも、タイ人となんらかの形で協力が必要とされるからである。)

著者 Matthew 女史はコーネル大学で ph. D. をとり、アメリカの対外援助 (Point IV program) が発足したときこれに参加、タイ国の教育省に5年間協力した。彼女は、この貢献のため、アメリカ国務省国際援助局より Citation of Meritorious Service を授与された。現在ニューヨークのブルックリン・カレッジ教育学部教授であり、国際比較教育を専攻している。

本書は彼女のタイ在勤の経験にもとづいたものであり、とりわけ彼女は農村における教育に努力しただけに、農村事情について、外国人としては珍しくくわしい。

本書の内容は、自由の国一ムアン・タイからはじまり、バンコクとタイの農村を説明する。しかし、本書のなかばがさかれ、またそれがこの本の特徴であるのは、これにつづくタイの歴史についてである。国王の物語、アユタヤにおける国王と外国人冒険者、アユタヤの陥落、シャムの再出発、キングモンクーとアンナ、チュラローンコーンと近代、シャムからタイランドへと、この歴史に7章があてられている。(バンコク王朝の200年たらずの歴史を一応知っておくことは、タイの近代化を理解するうえに、とくに重要である。)このあと、タイ人の性格、宗教、芸術などを述

べる。そして最後に、きわめて楽観的なタイの将来を簡単に言及する。

本書は、彼女の10年前の経験であるだけに、もうかなり時代おくれな叙述が、ところどころ見られる。たとえば、「バンコクでは小型ヨーロッパ製のタクシーがはんらんする」とあるが、今日、タクシーのほとんどは日本製だ。これは著者の責任というよりも、それほどタイは急激に変化発展しているということである。この変化発展について、著者があまり強調していないのは、タイの概説書として大きな欠点だと思われる。

しかし、とくに歴史に重点をおいたタイの入門書として本書は特色をもっている。加えて文章がきれいだし、写真も印刷もみごとで、読んでいてなかなかたのしい。タイへはじめてこられる研究者に、その専門のいかに問わず、目をとおしていただきたい本である。(本岡 武)

Khana Ratthamontri: *Pramuan Sunthraphot khong Chomphon Sarit Thanarat 2 Vols.* Rongphim Samnak Nayokratthamontri, Bangkok, B. E. 2507 (1964). 1318 p.

1963年12月8日、プラモンクットクラオ陸軍病院において不帰の客となったタイ国前首相サリット・タナラット元帥の遺体は、翌64年3月17日、バンコクのテープシリン寺院附属斎場において荼毘にふされた。本書はその火葬に際し国王より初火を賜った記念に参会者に配布された「領布本」の一部をなす「サリット元帥演説集」である。編集は内閣の手になり、第1巻には仏歴2502~2504年(1959~1961)、第2巻には仏歴2405~2406年(1962~1963)がそれぞれあてられている。表題には「演説集(Pramuan Sunthraphot)」とあるが、収録された内容は下表のとおり多岐にわたるもので、さながら「サリット首相公式発言集」の観を呈している。

(1) 挨拶 (Kham Prasai)	104篇
(2) 式辞 (Kham Klao)	93
(3) 議会演説, 声明文など (Kham Thalaeng)	17
(4) 演説 (Sunthraphot)	5
(5) メッセージ (San)	70
(6) 訓話 (Owat)	47

(7) 上奏文 (Kham Krapthawaibang-khomthun)	12
(8) 祝詞 (Kham Khwan)	80
(9) その他	10
合計	438

各篇の配列は内容とは無関係に年代順に行なわれているが、各巻冒頭には内容と日付を明示した目次がふされており検索に便利である。全篇中「挨拶」に分類されるものが量質ともに重要であるが、これには新年の挨拶、クーデタ記念日挨拶という国民を対象とした施政方針演説のようなものから、視察に赴いた東北タイの一寒村で、村民をまえに行なった挨拶まで含まれる。議会演説の大半は予算演説であるが、声明文はサリット政権が直面したいくつかの重要事件に対する政府の公式見解であって高度に政治的内容をもつ。「生活費値上り」、「仏教教団誹謗ビラ事件」、「ラオス・クーデタ」、「東北タイ分離運動首謀者処刑」、「ラスク・タナット声明」などがその内容をなす。

ピブン、プリディら人民党出身の理想主義的政治家たちが目指してきた民主主義への歩みを、西欧文明への盲目的追従として退け、デモクラシーへのリップサービスを一切拒否し、時代錯誤との非難をも甘受してひたすら独裁体制の確立につとめ、強権を背景に多数の野心的政策を推進してきたサリット政権の評価はかれの死後3年を経た今日、なおも定まってははいない。しかしその功罪はともあれ、30年の歴史の流れを真向から否定し、個人専制の色彩の極めて濃厚な特異の政治体制を作り上げたという点において、サリット政権の5年間はタイ国憲政史上画期的意義をもつものと思われる。この意味においてサリット政権研究の根本資料ともいふべきかれの公式発言集が権威ある機関によって編纂上梓されたことはまことに喜ばしい。本書におさめられた演説はいずれも腹心の ghost writers が起案し、サリットがこれに朱を加えたものと想像されるが、注意深い読者は、独特な論理の展開と頻出する愛用語の中に、強烈なかれの人格の流露を感得するに違いない。同時に配布された姉妹篇 *prawat lae phonngan khong Chomphon Sarit Thanarat* (サリット元帥の略歴とその業績) とともに一読をおすすめしたい。(石井米雄)

Wang Gungwu (ed.): *Malaysia, A Survey*. New York · London, Frederick A. Praeger. 1964. 466 p.

本書は、マレーシア連邦が独立する際に、この新しい国が内蔵する諸問題を多角的に考察するという目的のもとに、マラヤ大学を中心とした26人の学者によって書かれた論文集である。

編者の Wang Gungwu 教授によれば、マレーシアという言葉には、19世紀より20世紀初頭まで頻繁に用いられたが、それは、当時、マレー半島よりインドネシア諸島東端のモルッカ諸島までの地域を含む範囲を示す言葉であった。しかし、英蘭両国の植民地支配行政が確立されるにおよび、マレーシアという言葉は、その本来の意味をほとんど失い、それが再び注目されはじめたのは、1961年に、Tunku Abdul Rahman 首相が、マラヤ連邦、シンガポール、北ボルネオを政治的に統一するマレーシア構想を打ちだしてからである。この「マレーシア」は、以前、その言葉によって示された範囲の一部しか含まないまったく新しい意味を所有した言葉であるため、この地域の多くの政治家達に、かなりの誤解と混乱をもたらしたのである。歴史的に見ても、マラヤ、シンガポール、北ボルネオは、英国の植民地であったという共通点を除けば、一つの政治的共同体として存在したことがない。その上、マレーシア連邦を形造るための歴史的、文化的土壌は、必ずしも充分に肥えてはいない。したがって、連邦設立当初に、内外から懸念された事柄は、この国が、人種、言語、宗教などをまったく異にした複数民族社会から派生する解決困難な諸問題をどのように解決するだろうかということであった。特に構成諸民族の利害と関連する政治体制と経済発展の力点の置き所、個別の民族の利害を越えた固有の民族主義の育成、国語の制定、統一された教育の方法などは、最も懸念された問題であるが、本書は、このような諸問題を自然環境、歴史、社会と文化、経済、政治の5つの角度から理解しようとしている。

この点、本書は、連邦設立直後に出版されるべく書かれているため、シンガポールが連邦より離脱した今日、連邦の将来に対する予想が、当時どのようなものであったかを知るうえにも、本書の内容は、興味深い。このような論文集に常に見られることであるが、執

筆者によって、視点が異なるため、一概にはいえないが、それでもなお本書には、意外に、連邦の将来に対する楽観論が支配的である。ボルネオの民族問題が重視されている (Tom Harrison) にしては、中国人問題では、その協調性の高い点が強調されたり (Victor Purcell) している。

全体として見れば、本書は、マレーシア連邦が直面する諸問題を理解するためには、好個の入門書であるといえるが、国内の諸地域の具体的情勢にかんする資料に乏しい。またマレーシアにかんする英語の書物に見られる共通点であるが、日本軍政の諸影響が極度に低く評価されている点は、マレーシアの現実を一層深く突込んで研究しようとする者には物足りない。

(口羽益生)

S. Husin Ali: *Social Stratification in Kampong Bagan, A Study of Class, Status, Conflict and Mobility in a Rural Malay Community*. (Monographs of the Malaysian Branch, Royal Asiatic Society, I) Malaysian Branch, Royal Asiatic Society, Singapore, 1964. x+170 p.

著者は、現在マラヤ大学の講師をつとめるマラヤ育ちの新進の研究者である。本書は、著者が1959年10月から60年1月にかけて、ジョホール州の村落においておこなった社会学的・人類学的調査の報告書であり、マレー人によってなされた数少ない実地調査のひとつとして、非常に貴重なものといえる。

調査地は、Batu Pahat と Muar とを結ぶ幹線道路の東側に位置し、ゴム栽培を主業とし、これに Coconut と Arecanut の栽培を加えた農業集落で、Kampong Bagan とよばれる。156のマレー人世帯と11の中国人世帯からなっているが、著者が調査したのは、この中149のマレー人世帯についてである。

著者は、まずはじめに、Kampong Bagan の人人の収入源を分析して、地主階級、中流階級 (教師・書記など)、農夫階級 (自作と小作に細分される)、労働者階級、失業者階級の存在を指摘し、この村の成員が、経済的実力においてかなり異質的であることを示す。ついで、人格、教養、宗教上の地位、政治上の地位、職業、貧富などを判定基準として、村内において

高い社会的地位を占める者がどのようなものであるかを明らかにし、個人的な資質の重要性を認めつつも、いわゆる重要な地位を占めるものが、経済的に裕福な階級と結びついていることを示す。そして、互いに異なった階級に属するものが、社会生活の場でどのように分離されているかを観察する。

さらに著者は、このような構造をもつコミュニティで、政治的・経済的なあつれきがどのように表われているか、またどのように表面化せずにおさえられているかを、選挙、地主小作関係、生産物売買をめぐる商店と農家との関係などをめぐって述べる。

最後に、社会的・経済的地位の移動にふれて、個人的な能力を評価しつつも、村内においては、ある程度以上の土地をもった者が、その余力に応じてさらに所有地を拡大し、小規模の土地所有者がイスラム法による遺産相続による土地の細分化などを通じて転落の過程をたどること、また村外への移住者は、教育をうけたものを除けば、さらに低い地位へむかっての移動であることなどを明らかにする。

以上のような概要をもつこの報告書は、1) 中国人の位置・役割が完全に無視されていること、2) 階級・地位を分析する場合に親族関係にほとんど留意していないこと、3) Kampong Bagan とよばれるものが、実際にはある程度独立した2つの集落からなり、コミュニティとしての統一性をやや欠いていること、4) 調査者自身がマレー人であるため、マラヤの事情に通じていないものには理解が困難な場合があること、などのために生ずる問題点もあり、また、調査自体も精密とはいえない難い箇所もあるが、マラヤのゴム栽培地域を理解するために、きわめて興味深い記述を豊富にもっている。(坪内良博)

Herbert C. Purnell: *A Colorful Colloquial, An Introduction to the Study of Spoken Northern Thai based on the Work of E. R. Hope, revised and enlarged by Herbert C. Purnell. Overseas Missionary Fellowship, Chiangmai, 1962. vii + 100 p.*

先に Thai Reference Grammar の項で述べたようにタイ語にかんして新しい言語学的方法論をもって書かれた本は非常にすくないのであるが、それも標準

タイ語以外の方言にかんするものとなると、さらにとぼしいのである。本書はタイ国の北方方言の会話入門書とでもいうべきもので、チェンライ (Chiangrai) 県のメーチャン (Mae chan) 地区の方言をあつかっている。この書物の基礎をなすのは現代の記述言語学の方法であるが、その目的とするところは、言語の記述ということよりも、必要に応じてこの方言を使いこなすという実用的な点にある。従来のはっきりとした基礎のないあいまいなものではなく、はじめに述べられているルールさえはっきり理解すれば、非常に便利な使いやすいものである。

一見したところ Haas の Spoken Thai に非常によく似ており、表記法も Haas のものに必要に応じて補足を加えたものである。まず最初の Introduction の項で、この方言の音素体系と本書で用いられる表記法について簡単にしかし要領よく説明を加えている。私自身このメーチャン地区でフィールド・ワークを行なったのでこの方言には興味を持っているのであるが、著者の解釈は正しいと思われる。ただ、この方言の声調の数を著者のいうように7つとするか、あるいは6つと考えるか、解釈のし方によってちがいが出てくるのではないかと思う。本文は、全体を12の Units に分け、それぞれの Unit に Useful Words and Phrases, Hints on Pronunciation, Word Study といった Sections が設けられている。この点でも非常に Spoken Thai に似ており、まあいわば Spoken Thai の方言版だと思えばまちがいないだろう。ただ意味にかんする説明にややあいまいな点があるのはおしい。例えば、いずれも <疑問> を表わす /kə̀ə̀/、/kaa/、/bə̀ə̀/、/loo/ などについては、相互の意味的なちがい、あるいは用法のちがいを、もう少しはっきりさせて欲しいのである。しかし、とにかく本書であつかわれている程度の会話を身につければ、現地に行ってもさし当って不便を感じることはないと思う。

こまかい点ではいろいろ考えねばならない点はあるにしても、例えばフィールド・ワークなどのためにこの方言が必要となった際などには、非常に役に立つ便利な本である。初めて習う者にとっても、わかりやすくできている。ただ、ことわっておかなければならないのは、ここであつかわれている方言は、チェンライ県の北部に位地する地区のそれであって、同じ北タイでもチェンマイやランパン (Lampang) など他の地域の言

葉とは多少なりともちがっているということである。

(桂 満希郎)

Herbert C. Purnell: *A Short Northern Thai-English Dictionary (Tai Yuan)*. Overseas Missionary Fellowship, Chiang-mai. 1963. vi+125 p.

本書は先に述べた *Colorful Colloquial* と対を成すもので、タイ語北部方言の小型辞書である。あつかわれている方言は、やはりメーチャン (Mae chan) 地区のそれである。語彙の数は、ざっと計算して、1900 余りである。著者が1962年から1963年にかけて現地を集めたもので、単語の数そのものは余り多くないにもかかわらず、熟語の類がかなり多く取り入れられているのは便利である。大体に、このような方言を習得する場合、本当に困難なのは音素、声調、語彙などのちがいがよりも、むしろいろいろなイデオマティックな表現を身につけることだと思う。そういった意味で、巻末につけられた *Restricted Intensifiers* の項は非常に有益である。

バンコクのタイ語は全国の小学校で教えられており、かなりすみずみまで行きわたっているとはいえ、街から離れた村落や山地民の村などで仕事をする場合には、やはりその土地の方言でなければ仕事を進めることができない。こういった点を考えると、本書と先に述べた *Colorful Colloquial* を並用すれば、非常に効率よくこの方言を習得することができるであろう。

本文の前に、この方言の音素体系と表記法とを、チェンマイ方言および標準タイ語と対比しながら説明している。標準タイ語には5つ、チェンマイ方言には6つ、チェンライ方言には7つの声調を設定する。しかし、著者のいう High Long Fall, High Short Fall (音節末尾に閉鎖音を有する), High Short Fall (音節末尾に閉鎖音以外の子音を有する) は、相補的分布を成すから、これらをひとつにまとめて、全体としては、6つの声調を有すると解した方がより簡単に説明できるのではないかと思う。

語彙の数もまだ充分ではなく、意味にかんする説明にもややあいまいな点や取りちがえているのではないかと思われる点もあるけれども、とにかくこの方言を習う際には、本書を手掛りとするのが一番よいであろう。

(桂 満希郎)

H. L. Shorto: *A Dictionary of Modern Spoken Mon*. Oxford Univ. Press, London, 1962. xvi+280 p.

われわれがその実態を十分に知ることができないような小言語についての辞書とか文法書などは、それが多少不正確なものであっても、少なくともそれ以外に利用しうるものがないという消極的な意味ではやはりそれなりの価値をもっているものである。モン語については R. Halliday: *A Mon-English Dictionary*. Bangkok, 1922. がその例であった。しかしその不完全さは別としても、この辞書は文語のそれであって、これによって現代モン語口語を知ることはいないのである。というのは、モン語では単に口語と文語の間に著しい隔たりがあるばかりでなく、文語の綴字と口語の音素形式を対応づける一定の規則すらないからである。ここにあげる Shorto 氏の辞書はまずこの点をはっきりさせて、本文をもっぱら口語の辞書とし、付録として個々の単語の綴字と音素形式との対応表を掲げている。このようにモン語の口語と文語とをはっきり区別したのは Shorto 氏が最初だと思う。

口語の辞書、とくに小言語の場合のように実用的な目的よりもむしろ言語学の専門的な目的をもった辞書においては、何よりもまず表記法の正確さが大切である。むろん完全な音素表記にこだわる必要はないわけだが、少なくともその言語の音素体系をよく反映するものでなくてはならない。本書は IPA の記号を使って、著者もことわっているように必ずしも音素表記ではないけれどもむしろそれよりも詳しい程度の音声表記がしてあるから、この点、安心して使える辞書である。著者はロンドン大学 SOAS の Lecturer であるが、ロンドン学派の音声学的技術の強さにあらためて感心させられる。

さて、本書は、まず 1949-50 にロンドンで調査したものを 1950-1, 1956-7 の 2 回にわたるビルマでの現地調査で補充・再検討した結果にもとずいていて、標準的なビルマ・モン語であるサルウィン東岸の方言を対象としている。見出し語の数は約 5,000 で決して多くはないけれども、その内容は実に豊富で、品詞別・意味の説明・例文・熟語とその例文・派生語と同義語など関連語彙・綴字・派生語や借用語についてその由来等々がいちいち掲げられている。相当長期間にわたる

調査研究の蓄積があるとはいえ、これだけのものを作った Shorto 氏の語学力と綿密さにはこれまた驚嘆するのである。

もちろん細かい点では疑問と感ずるところがないわけではない。たとえば派生関係の説明にしても、palət (文語 *kamlat*) «thief» を labial form of klət (文語 *klat*) «to steal» とするように文語の綴字にかかわらず口語形式どうしの関係として説明しているのだが、何か共時態と通時態がごっちゃになっているような気がする。著者は本書を、その冒頭で、現代ビルマ・モン語の「記述」の一部とよんでいるけれども、上のような点も含めて全体に、たとえば、Haas: *Thai English Student's Dictionary* (1964) に見るような記述言語学的なまとまりはない。

ともあれ、これが本書の著者をはじめロンドンの学者たちの東南アジア語研究の水準を示すものとすれば、続刊を予定されているらしいモン語の文法書もさることながら、パラウン語・ワ語などすでに現地調査した諸言語についてのくわしい報告をも是非とも期待したいものである。(三谷恭之)

Tatuo Kira & Tadao Umesao (eds.):
Nature and Life in Southeast Asia IV.
Fauna & Flora Research Society, Kyoto,
1965. Vii + 402 P.

大阪市立大を中心とする東南アジア、主としてタイ・マレーの調査報告の第4巻である。前回に引きつづき、自然科学と人文科学の両面における多彩な研究結果が発表されていて、日本の学界の東南アジア研究も、いよいよ軌道にのってきたという感じが深い。標題を追ってゆくと、

日本・タイ協同生物調査隊(1961-2)の行動

岩田慶治,

タイ国における森林の3つの主要型の研究

(I) 森林の構造及び構成植物

小川房人, 依田恭二, 吉良竜夫, 荻野和彦, 四手

井綱英, ドンケオ・ラタナウォン, チャーン・ア
パスット

(II) 植物の量的関係

小川房人, 依田恭二, 荻野和彦, 吉良竜夫,
北部タイの少数民族社会の栽培植物

松岡通夫, 吉良竜夫

東南アジア採収の有蓋陸産貝類

波部忠重

タイのマングジュウダニ (I)

青木淳一

東南アジアの原尾目

今立源太良

中部タイにおける土壌内小形節足動物の季節変化

荻野和彦, パイラート・サイチュア, 今立源太
良,

南ベトナムの蝶

井上貞信, 川副直人

東南アジアの北部地方における礼拝典儀

岩田慶治

報文の内容は、それぞれの分野において専門的の立場から批判され、検討されるであろうが、全体を通じての感想は、この第4巻が今までの報告のうちで最も充実しており、市大の調査報告の中核であるかのように思われる。その報文も第1巻においては個々の散発的のものが多かった観があるが、おおいにそれが集約的のものとなり、そのひとつひとつが、その分野における重要文献になりつつあることが認められる。

種種困難な事情のつきまとうこのような海外の学術調査の実情は十分に察しられるけれども、せっかくここまで生長してきた研究グループの活動であるから、それをさらに発展させて、日本における東南アジア研究のひとつのパターンを確立されることを望むこと切なるものがある。調査の中核となった大阪市大関係者、ならびに編集者の努力に深甚の敬意を表するしだいである。(吉井良三)